

# 公立保育所における0歳児保育の検討

—子どもと向きあえる保育の工夫に取り組んで—

井口 均（長崎大学教育学部）

丸野 啓子（長崎市立保育所保母）

## はじめに

公立保育所の場合、個別の保育所が独自に系統的に実践を積み重ねることが難しい状況にあります。保育経験の長い保育者が多いことを考えると非常に残念としか言いようがありません。それには、保育者の移動が周期的に繰り返されることが深く関係しています。とりわけ中心的役割を果たしていた保育者の異動はその保育所の保育全体を様変わりさせてしまうことも少なくありません。また異動が繰り返されるために保育者間の意志疎通や相互協力に向けての話し合いがなおざりなものになったり、同一保育所内でありながら各クラス担任ごとの異なった保育観にもとづく実践が独り歩きしがちです。さらに所長も定期的に交替するため、保育所運営面での継続性を維持することも困難なようです。いずれにせよ、各保育所の子どもの実態を共通認識として互いに深め、それにもとづく保育体制や内容づくりへの実践的工夫を積み上げながら、実践課題を年度ごとに具体化していく継続的体制づくりの面で困難性があるといえます。

財政難や少子化を理由に民間活力導入の方向が強くうち出されていることを考えれば、公立保育所は保育実践の成果を客観化し、その存在理由をより積極的に示す必要があります。確かに、公立保育所で保育の継続性を求めることは困難な課題ですが、「保育の行為は、もともとそこにいる保育者と子どもとの出会いのなかで、瞬時に生まれ、瞬時に消え去るもの」と考えれば<sup>(1)</sup>、園としての保育の継続性や恒常性が保てないことをそれほど深刻に考える必要はないのかも知れません。むしろ、「その場かぎり」のものとして消えていくものならば、各保育者が「その場かぎり」の貴重な経験である子どもたちとの生活を客観化しながら、まず保育者レベルでの保育体験の蓄積と成果を大事にする必要があるのではないのでしょうか。そうした資料に対して様々な議論がなされ、一人の保育の積み重ねが他の保育者や保育所全体に広がっていけばよいのではないのでしょうか。

## 1. 0歳児保育の実践的成果と今日的課題

### (1) 保育研究・運動における共通認識

乳児保育実践の成果について、金田利子は全国合研を中心とした保育研究・運動における討論内容をもとに次の6点を挙げています。第1は入園当初の慣れない時期での保育における「とにかく外へ」対「まず自分の部屋から」の議論。第2は「個人もち玩具の是非」をめぐる議論。第3は「おむつはできるだけはやく外す」対「おむつを外すのはわりなくゆっくりがいい」かの議論。第4は「親との関係をめぐって—視座の転換—」。第5は乳児期の玩具をめぐる「本もの」対「似て非なるもの」かの議論。第6は保育体制、保育空間、それに地域との関わりに関する議論です<sup>(2)</sup>。

「外か部屋」かの議論は1歳児の保育で取り上げられたものです。一方は、狭い室内ではものの取り合いや衝突が頻繁に起こるのに、外に出るとその喧騒さがピタリと止み、ま

るで「人が変わったように」「機嫌がよくなり」「活発になる」、その結果、集中力もつき興味も広がるから散歩を重視しようという意見です。それに対し、「外にでない落ち着いた場所がないというのでは、いつまでたっても部屋の中が子どもにとってイヤな場所になっていしまう」。まず部屋を居心地の良い場所にし、次の段階で散歩を位置づける方が思考が育つという反対意見がありました。結論的には、「いろいろな尺度における“対”となる両面が必要なのではないか」「内-外はどちらも異質であるがゆえに不可欠であり、それは、静-動、落ち着き-躍動、個-集団などにおいて両面が必須であることと呼応する」という認識が確認されています。

「個人もち玩具」の議論は必ずしも対立的意見が出されたわけではありません。1歳児が安心して遊べる空間をつくる際の1つの方法として注目されました。自他が分化し始め、集団の中での個を積極的に位置づける視点から、「みんなのもの」ばかりでなく「自分ひとりのものをどの子にも保障」すべきではないか。具体的には、各家庭で自分の子どもの玩具を段ボールなどで作ってもらった実践例などが示され、その取り組みが個としての子どもの位置づけだけでなく家庭と保育所との子どもの心理的つながり、さらに「～ちゃんの」がしっかり出るために「貸してね」の関係が形成されることで集団と個の関係も発展することが強調されました。自宅から個人もちの玩具を保育所に持ってくるやり方は諸外国では当然のことですが、それとは異なった「日本独自の方法」として積極的に評価されました。自宅で愛用している玩具を園に持ってくることを含め、「この時期の自我の拡大、自己の位置、安心感の連続などを集団の中でどう保障するか」を様々な工夫によって創造的に発展させる課題を提起しています。

「おむつ」の議論は、おむつをはやく外した方が子どもの運動能力や自主的な活動を促進するという立場と、習慣形成をどのようにすすめていくかをめぐり意見対立でした。おむつが運動能力や自主的活動にどの程度の悪影響を与えるかを実証的に明らかにする必要が生じましたが、トイレトレーニングにおける神経質な対応は心理的発達に良い影響をもたらさないと理解で一致点が見い出せたようです。その点をふまえて、各園の実践はより良い方向を探ればよいとの結論に達しています。

「親との関係」は、1つは「保育参加」の仕方として全員の保護者が一斉にではなく、自分の子どもの誕生日にその親だけが保育者の助手として1日の保育に参加する方法が「共通の財産」として位置づけられました。普段の暮らしぶりを見ることができし、保育者と保護者が日頃気になっていることをお互いに出しやすいし、結果として子どもへの共通理解が得られ、非常に有意義であることが実践的に確かめられました。ただし、この取り組みには保育者の「民主的体制づくり」と「自己変革」が求められることをつけ加えねばなりません。もう1つは、「家庭の生活・育児文化と保育者の保育文化」のずれをどう扱うかの問題です。多くの場合、口に出さなくても保育者は親の未熟性や間違った育児観を責めていることが多いのではないのでしょうか。そこには正しいか間違いかの尺度しかありません。それでは保育者と保護者との相互理解は得られません。どちらが正しいかではなく、「異文化と捉え」「多文化主義の視点」にたって、相手の「座標軸に身を置いて」みる必要性が指摘されています。

玩具に関する議論は1歳児の玩具のもつ発達の意味が問題にされました。機能的あそびからみたら・つもりあそびへの移行に伴う玩具として、子どもたちのイメージを引き出

し、活発なみたてをもたらしものとして「似て非なるもの」を自覚的に位置づけることが重要な課題となりました。本物（実物）ではうそっこ（みたて）を引き出しにくいし、反対に類似性が全くないものだとみたては不可能になります。「能記」と「所記」の分化という非常に大切な力を引き出す上で「本物に似ているけれども、本物と異なるものが不可欠」ということが共通理解となっっています。

保育体制をめぐる議論は、「保育の質」との関わりで問題にされてきましたが、いくつかの問題が課題として残されています。その1つが、複数担任でいろいろ工夫されている保育形態について、形態を変えた場合に保育や子どもにどのような変化が生じたかをきちんと問題にすることです。それは「保育される子どもの立場にたって」保育体制を見直すことを求めたもので、どんな子どもに育てるのかについての視点を欠落させた体制いじりを危惧したものといえます。

## (2) 乳児保育の課題

厚生省調査によれば、1996年10月1日時点での0歳児入所児童数は74,083人（構成比4.7%）、1・2歳児は393,170人（構成比24.7%）に達しています。その一方で、0歳児の待機児童数は12,290人、1・2歳児は23,081人となっています。乳児保育をもとめる保育要求に十分応えているとはいえません。それは、3歳児と4歳以上児待機児童数が、各々7,057人、5,986人であることをみれば明白です。その意味で、乳児を受け入れる条件整備を充実させていく課題をまず指摘しなければなりません。

保育実践的の課題としては、第1に保育者と子どもの関係づくり自体が重要な課題であることの捉え直し、第2にその関係づくりを保育のなかでどのように具体化するか、第3に機能発達をふまえた保育の工夫、第4に乳児の「状態」への注意とそれを把握したうえでの保育の工夫などを挙げることができます。

保育者と子どもの関係づくりは、親が職業を通して社会的自立や生きがい模索への営みと育児との分裂（あるいは対立）状況が進行するなかで一層重要となっています。家庭との関係においても、二人三脚というより家庭や親を支える視点に立ち、子どもと心の通い合いを紡いでいく、「相互主観的」相互作用と「特定の継続的」な関係が問題にされています<sup>(3)</sup>。「その子」のプライベートな「心象風景」（視線、笑い、みたてなどの意味）をどこまで共有できているかを検討し、改めて保育者と子どもとの関係を問い直さなければならぬということです。当然、保育体制のあり方や日々の活動での関わり方が問われることとなります。

日々の保育で特定の子どもと「意味を共有」する際に重要となるのがあそびであり、散歩であり、「かみつき」「だだこね」への対応です。興味対象、発見したもの、要求や不安などの共有と共感に基づく対応が求められるからです。手作り玩具によるあそびや散歩の道順などへの工夫も求められています。

発達をふまえた保育の捉え方も深められ、「早いか遅いかの観点をひとまず捨てて、子どもに獲得された力がどのくらい確かなものになっているか」を重視し、「でき方」、「獲得の順序性」、そして「機能間の連関」を問題にしてきました<sup>(4)</sup>。そのため、保育では「いきいきと生活しあそべる活動主体」としての育ちを大事にし、周りに意欲的に働きかけながら自分の力（諸機能）をバランスよく獲得していける生活を工夫してきました。手作りおもちゃによるあそびもその1つで、今後もさらなる工夫が求められています。

乳児の「状態」への注目は、今日の家庭での生活環境の悪化や園での生活条件と深く関わっています。生活リズムの乱れ、両親の多忙さ、保育者や他児との関係その他から生じるこどもの不機嫌さや不活発さといった子どもの「状態」をもたらしていることは否定できません。確かにその「状態」は活動そのものではありませんが、例えば子どもたちが自分の生活活動に集中できるか、だだこねやかみつきによって周囲とトラブルばかり起こすか、といったかたちで毎日の保育活動の展開に大きな影響をあたえます。その意味で、子どもの「状態」を視野に入れた日課づくり、あそびづくり、子どもとの関係づくりが重要な課題となっています。

以上の成果や課題を念頭におきながら、0歳児保育の実践的事例を検討しました。

## 2. 丸野さんの実践報告：「0歳児とむきあって感じ学んだこと」

今回検討した0歳児保育実践は、H9年9月の九州保育団体合同研究集会（熊本で開催）の分科会で丸野さんが提案する予定にしていた実践です。そのレジメと本人から直接聞いた説明内容について、井口が検討しまとめました。多少の解釈を加えた部分もありますが、基本的には丸野さんの報告内容にそって整理しました。また、この実践は丸野さん1人でなされたものではなく、一緒に協力体制をとって保育にあたった鴨川久美（保育者）さんと宗 澄江（看護婦）さん達とでつくりあげたものであることを記しておきます。

### (1) 実践報告するに至った経緯と保育所の概要

#### ①経緯

今回、0歳児の実践報告をされた丸野さんは、保育歴が23年になる保育者です。担任経験の殆どが2歳児クラス以上で、6年前（H3年度）に初めて0歳児を担当したそうです。その経験から乳児保育の重要性を実感するとともに、わが子の育児体験の中で必ずしも客観化できなかったこの時期の子どもの姿に改めて驚きを感じたとのこと。丸野さんが0歳児保育で大切にしたいと考えたことは、一人ひとりの育ちに応じた保育内容や大人（保育者）の関わり方をどのように工夫するかでした。

その後、H8年度に0歳児クラスを担当することになり、初めて担当した経験での問題意識をもとに、一年間を通して、0歳児の生活の様子と成長の姿をとらえると共に、保育者の働きかけについても検討したいと考え、自分の実践をまとめることにしたそうです。それが今回の報告につながったわけです。

#### ②保育所の概要

丸野さんが勤務しているT保育所は、昭和47（1972）年4月1日から認可された公立保育所で、生後3か月から就学までの乳幼児と6人の障害児を含む140人の定員となっています。職員数（H8年度）は、所長、専任保母17人、嘱託保母4人、看護婦1人、庁務員2人、調理員3人です。

施設は鉄筋コンクリートで、南北方向に各部屋が並ぶ平屋形式で、場所は、「お宮日」の龍踊りで有名な諏訪町にあります。周囲は寺や住宅が密集し、青空市場や商店街も近くにある市の中心部に位置しています。当然、隣接する道路の交通量も多くなりますが、観光名所となっている中島川沿いの探索をはじめ、並木道、公園、また市民会館などで遊ぶこともできます。年長児の場合は、風頭山の頂上まで散歩をすることもあり、中心部とはいえ、近隣の自然環境を積極的に活用して保育に取り組んでいます。

(2) H8年度における0歳児の入所状況と保育体制

4～5月の時点で男児6人（4月時点で、11か月児、9か月児、8か月児、7か月児が各1人と11か月児が2人）と女児1人（6か月児が1人）が入所。6月に入り、4か月の男児1人と3か月の女児1人が入所し、0歳児クラスは計9人となっています。6月入所の2人受け入れに際しては、空調設備をはじめ、木浴室の設置、汚物置き場とドアの改造などを行ない、部屋を以前より広めに使える工夫をしたそうです。

保育は、4～5月入所の7人を正規保母と加配保母の2人があたり、6月入所の2人については看護婦1人が担当することを基本に、保育場面では状況に応じた役割分担を行ないながら、臨機応変に対応することを確認しています。また、毎月1回開催されるカリキュラム会議や職員会議で気づいたことを出し、気になる子どもに対しては全職員から援助が得られるように話し合いを行なっています。更に、保護者との間でも、毎日「手つなぎノート」（図1参照）に子どもの様子を互いに記入し、コミュニケーションをとり合えるようにしています。

年 月 日 曜日 ・ 天気				
	就寝	:		
	起床	:		
	きげん	良い・悪い	朝食	食べた 食べない
	検温		排便	有 回 (普・軟・下痢) 無
(連絡事項を記入)				

【家庭から】

給食	・全部食べた ・残した
排便	・有 回
午睡	・良く眠った・時々目覚めた・眠らなかった
(連絡事項を記入)	

【園から】

図1 「てつなぎノート」

(3) H8年度0歳児保育の実践

①今回の0歳児保育で大切にしたい9項目の内容

- a) 子どもとの信頼関係をつくるため、スキンシップをしながら要求をしっかり受けとめる。
- b) 子どもとの信頼関係を月齢に応じたあそびを通してより確かなものにするため、共感的関わりを大切に、手作りおもちゃの活用や玩具の与え方にも配慮する。
- c) 睡眠、食事、あそびの生活リズムをつくるため、月齢に応じたリズムを大切にする。
- d) 健康面への配慮として、衛生・安全面への注意、一人ひとりの状態に合わせた離乳食のすすめ方、日光浴・外気浴・素足・薄着・赤ちゃん体操・散歩などの取り組み、病気・皮膚疾患などへの早期治療と正しい投薬方法を保護者に連絡する。
- e) 自我の芽生えを大切にするため、自発的な行動を促すようにする。
- f) 発話を促すため、絵本・指人形・わらべうたなどを用いたやりとりを楽しむ。
- g) 歩行の確立を促すため、探索活動を危険のない範囲で自由に行なえるようにする。
- h) 物や他児との関わりを活発化するため、意識的に保育者が仲立ちになる。
- i) 保護者が安心して働けるようにするため、保護者とのコミュニケーションを意識的にとり、子どもの成長を伝え合いながら共に育ち合う関係づくりを大切にする。

## ② 1日の生活の流れ

朝7時30分から夕方6時までの子どもと保育者の生活の様子をまとめたのが表1です。基本的な流れとして、朝登所してからおやつをとり、それから好きなあそびをしてから給食に入るまでが午前中の主な活動です。午後は、午睡の後のおやつとあそびとなっています。

表1. 1日の主な生活の流れ（丸野作成の表を一部修正）

時間	子どもの生活と保育者の働きかけ		
午前	7:30 ～9:00	・登所 (部屋への移動)	・スキンシップと言葉かけを行いながらオムツ換えをする *「手つなぎノート」の確認
	9:15	・おやつ (または、ミルクを飲む) ・午前睡	・食前に、一人ひとりの手を拭いてあげる ・子どもによって必要な場合は、をおやつ後に午前睡をする(～10:20) ・片付け、オムツ換えを必要に応じて行なう ・食後に、一人ひとりの手や顔を拭いてあげる
	9:45	・自由にあそぶ	・この間に、各児の検温を行なう
	10:20	・保育者と一緒にあそぶ	・午前睡の子どもを起こし、各々の発達に応じた玩具(日によって違う)を準備してあそびをひきだす ・必要に応じてオムツ換えを行なう
午後	11:10	・給食  *食べ終わったら自由に あそぶ	・食前に、一人ひとりの手を拭いてあげる ・必要に応じて、子どもへの言葉かけや補助をしながら、食事を促す ・必要な子どもにはミルク補充を行なう ・食後に、一人ひとりの手や顔を拭いてあげる ・片付け、オムツ換えを必要に応じて行なう ・眠たい子どもから寝かせていく
	12:00	・午睡の部屋に移動する ・お昼寝をする	・事前に手分けして、布団の準備をしておく ・各児を自分の布団に寝かせていく ・「手つなぎノート」への記入
	15:00	・起床	・必要に応じてオムツ換えを行なう
	15:15	・おやつ (または、ミルクを飲む)	・食前に、一人ひとりの手を拭いてあげる ・食後に、一人ひとりの手や顔を拭いてあげる
	15:45 ～18:00	・各児自由にあそぶ	・必要に応じて、子ども、子どもと一緒にあそぶ ・必要に応じてオムツ換えを行なう ・「手つなぎノート」への記入 ・直接連絡すべき事柄など、お迎えの保護者と簡単な会話

## ③ 個々の活動における保育の工夫と子どもたちの変化

### a) 食事

保育者4人の体制(休憩要員の5時間パート保育を含む)で、なるべくゆったりと接し、一人ひとりのペースを大事にしながら食べさせていくことを基本にしています。ミルクに関しては、3か月児が保育所のミルクを最初の頃嫌がったため、家庭で使用していたものと同じミルクを購入して与え、当初みられた問題を解決しています。また、離乳食については、調理担当者と相談して、月齢、食べ込める分量、咀嚼力などに応じた初期食・中期食・後期食を決めるなど、きめの細かい工夫を行っています。

さらに、食べること自体の楽しさを実感させるために、食事中での語りかけや自分で食べることを大切にしています。一人ひとりに「わー、よく食べたね」「モグモグ、おいしいね」と語りかけたり、自分の手で掴んで食べることなどを積極的にさせています。

月齢が高まるにつれて味にも敏感になり、ペーっと吐き出したり、嫌いなものが入っていると目をつむってしまったりする場合も生じています。そんな時は無理強いせず、量を加減したり、好きなものと混ぜて調理したり、励ましたりなどして根気強く働きかけています。「手つなぎノート」の家庭での様子などから、食行動にみられる変化の意味を心理的状态とも関連づけてみる気配りもなされています。

しかし、実際問題として子どもが食べようとしないうち、保育者は食べさせたいという思いと子どもの食べたくないという思いをどのように折り合いをつけるか悩む場合が多く、互いの駆け引きを交えながら一進一退の状態が続くこともあったようです。そんな時は、「ま、ぼちぼちいこか」の気持ちを忘れないように気をつけているとのことでした。

#### b) 睡眠

食事の場合と同様に、一人ひとりのペースを大事にしながらか働きかけていくことを基本にしています。月齢の低い3～4か月児に対しては、午前睡と午睡とも十分眠れるように環境づくりに配慮しています。他の月齢の高い子どもたちも基本的に午前睡と午睡の2回寝をすることを決めています。とくに午前睡では眠たくない子どもを無理やり寝かせることはしていません。また、午前中のあそびを充実させる意図から、睡眠時間を意識的に30～45分程度にして起こしています。その結果、一定の生活リズムがつくられたのか、あそびにもすっきりした表情で参加でき、給食時まで眠気を引きずる状態はみられなくなっています。

午睡は、0歳児クラスの自分たちの部屋と1歳児クラスのどちらでも眠れるようにしており、子どもが落ち着ける場所を選べるようにしています。寝つきが悪い場合は、手足をマッサージしたり、抱きながら子守歌を聞かせたりなどして眠れる雰囲気づくりをしています。また、眠る様子もなく遊んでいる場合は、しばらく一緒にあそび、眠そうな状態になった時をみはからって布団に誘っています。

#### c) 排泄

ほとんどの子どもが家庭で紙おむつを使用していますが、保護者に布おむつの重要性を説明をした上で、保育所での布おむつ使用に協力を求めています。幸い、全員の保護者から協力が得られました。目標として、1歳クラスに上がったからの夏までにパンツが使えるようになればよいと考えたようです。0歳児クラスの終わり頃には、大半の子どもがトレーニングパンツへ移行しています。

おむつ交換は、一人ひとりに「ほーら、気持ちよくなったね」「またシーシーが出たら教えてね」と言葉かけをしたり、身体をさすりながら行なっています。また天気のよい日には、新しいおむつにとり換える前に日光浴を楽しんだり、筋緊張のある子とは赤ちゃん体操を一緒にしたりなどしています。

おむつ換えを嫌がる子どももいたようですが、お気に入りの玩具をもたせてみたり、気持ちを切り替えさせるために手あそび歌を歌ったりしながら、手早く済ませるように気をつけています。

#### d) あそび

0歳児の場合、あそび活動と他の生活活動とが一体で、毎日しっかり食べ、きちんと排泄し、十分眠ることが機嫌よくあそべるための基本条件となっていることを

感実したようです。そのことをふまえ、月齢や好みを考慮して一緒に遊ぶように心がけています。1年間を通して取り組んだ「わらべうた」「絵本」「手作りおもちゃによるあそび」「散歩」にみられた主な変化について、以下のような報告がなされています。

#### [わらべうた]

かまってもらいたくて情緒的に不安定になり、泣いている時などに、あやすために手あそび歌などをよく歌うことから始まっています。最初は歌ってもらうと泣き声が次第に小さくなったり、あやしてくれる保育者をじっと見つめていると安心できたのか、そのまますーっと眠ってしまうこともあったようです。また、一緒にやりとりを楽しむあそびに参加することも時折あったようです。とにかく一対一でゆったりと接していくなかで、嬉しい気持ち、楽しい気持ち、もっとかまって欲しい気持ちなどが子どもの表情からよみとれるようになり、信頼感ともいえる結びつきが形成されていくことに改めて“不思議さ”と驚きを感じたそうです。子どもは、リズムのとり易い単純なものや、同じ歌でも変化をつけて繰り返し楽しめるものを好んだようです。あやしあそびで用いた例を挙げると、“馬は としとし”“船こぎ”“おーやぶ、こやぶ”“とうきょうと にほんばし”“ちょち ちょち”“うえからしたから”“いちり にり”“にぎり ぱっちり”“しんわり たんわり”などです。その子が喜ぶものを見つけて繰り返し楽しめればよいのであって、決して新しい歌を次々と歌う必要はないとのことでした。第Ⅳ期の頃には「ちょち ちょち あわわ」「しんわり たんわり」と言っただけで一緒に動作ができるようになったとのことでした。

#### [絵本、ペープサート、指人形など]

毎日の生活の中で活動の切り替えが必要な場面や主に昼食などに絵本を読んでいます。子どもを膝の上に乗せて読んでいると1人、2人と子どもが集まり、興味に目を輝かせて見入る姿が初めの頃みられました。時折、ペープサート、ぬいぐるみ、指人形などを用いてお話することもありました(写真1参照)。そうした積み重ねのなかで、「お話しするよ」と言うと、全員が集まるようになり、指差しや

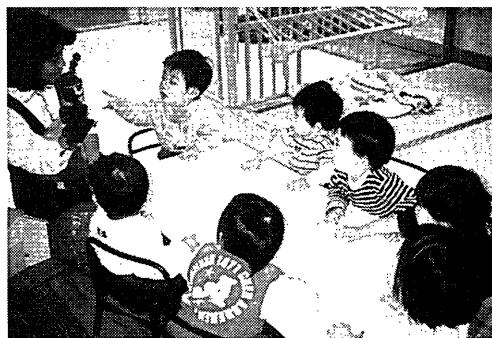


写真1 ばいきんマン人形でお話

「あっ、あっ」といった反応をしながら集中して聞く姿が観察されています。

#### [手作りおもちゃによるあそび]

当初、「沢山作るぞ」と意気込んでいたようですが現実の忙しさに振り回され、思ったほど作れなかったことを保育者は反省しています。手作りならではの「暖かさ」や身近にある素材を利用して作るために子どものあそびに抵抗なく取り入れられていく良さもあります。次に示している写真2～5、図2～4が、今回保育者が作った手作りおもちゃです。

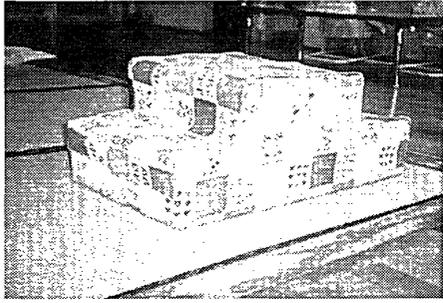


写真2 踏台

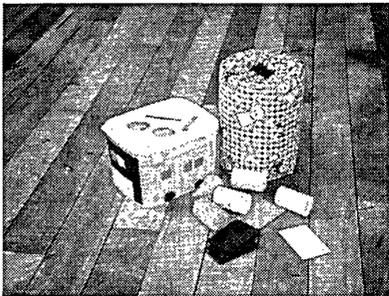


写真3 ぽとん落とし

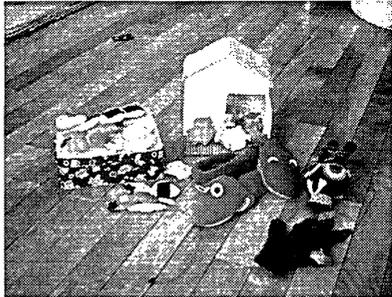


写真4 指人形・ぺったんはずし



写真5 ベッドの部屋

\* 踏台の作り方

牛乳パック（1ℓ）を約60個程使用する。その牛乳パックの中に新聞紙を詰めて凸型に並べる。その形ができあがったら、要所をガムテープでくっつけておく。最後に牛乳パックの表面にボンドを塗り、型を切り取っていた布をしっかりと張りつける。

\* ポットン落としの作り方

ミルク缶やタッパーを使用。ミルク缶の場合、蓋は使わずに布でくるむ。上部の口はゴムを入れて穴を開けておき、底はボンドなどで張りつける。タッパーの場合は、蓋の部分をいくつかの形に切り抜く。中に落とすものも一緒に作る。

\* 指人形・ぺったんはずしの作り方

指人形は、カラー軍手を使用。形に応じて中に綿や布などを詰めて成形する。顔の各部はフェルトを用いて作る。

ぺったんはずしは、主にフェルトでおにぎり、目玉焼き、いちご、魚などの形を作る。それに綿を詰めて成形して縫い合せた後、マジックテープを縫いつける（ボンドで貼っても良い）。もう一方の箱造りは適当な空箱を布でくるみ、上部に同じくマジックテープを縫いつける（ボンドでも可）。

\* ベッドの家の作り方

ベッドを使わなくなったら、下段を開けて出入りできるようにする。段ボールで側面や背面の壁を作り、屋根をとりつける。ままごと用に台をつければでき上がり。

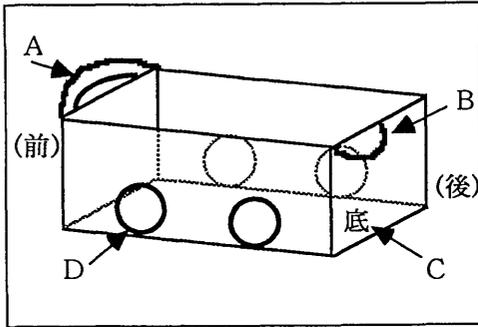


図2 段ボールの車

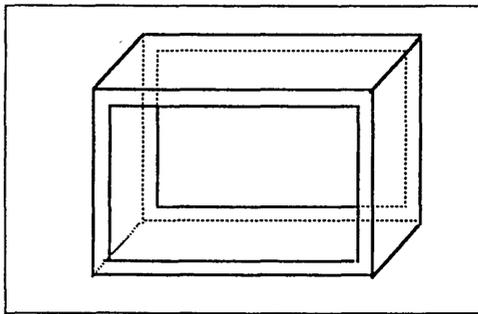


図3 段ボールのトンネル

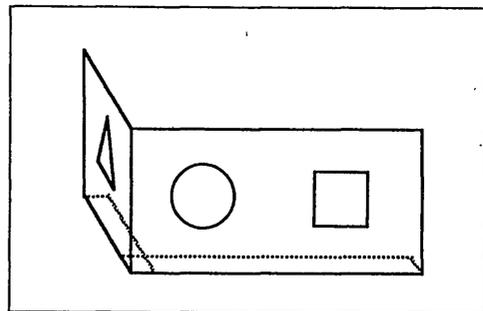


図4 段ボールのサークル

\* 段ボールの車の作り方

段ボール箱で底 (C) の部分を切り取ったもの、そのままのもの2種類。車輪 (C) は、紙に描いたものをそのまま貼る。後部の紐 (B) は自分で移動させる時があると便利。前部に段ボールの一部を切り抜いて残し、色つきセロハンなどを貼ると操縦部分の雰囲気が出る。

\* 段ボールのトンネルの作り方

大型テレビ用段ボール箱の両面を切り抜いてつくる。その後、広告用紙を2〜3枚重ね張りをして強度をつけ、乾いたら色画用紙を貼って仕上げる。各角部に色ガムテープを貼ってアクセントをつけたり、強度をつけておく。

\* 段ボールのサークルの作り方

冷蔵庫や洗濯機用段ボールをL字型やコの字型に開いて作る。各面に単純な形を切り抜いておく。大きいものや隣接させて切り抜くと強度の面で問題が生じる。できたらトンネルの場合と同様、広告紙2〜3枚重ね貼りをした後、色画用紙を貼って仕上げる。各縁に色ガムテープなどを貼るとなおよい。

以上のような手作りおもちゃで子どもたちがどのように遊んだのか、その様子についての主な記録は以下の通りです。

“ぽっとん落とし”では、ミルク缶の方で8か月過ぎ頃から出し入れしてあそびはじめていますが、タッパーは1歳半過ぎないとできなかったようです。そのため、子どもたちはタッパーの蓋をはずして単純に出し入れを楽しんだそうです。

“段ボールのトンネル”は、様々な反応が最初に見られたようです。「すーっとくぐり抜ける子、「何かなー」と覗き込むが中に入れない子、全く無関心な子。ところが、他の子がくぐり抜けてあそぶ姿に安心し興味をもったのか、次第にどの子もくぐり抜けをしてあそぶようになっていきます。第IV期では、偶然トンネルが倒れた時、上からトンネルの中に入って隠れてみたり、「いない いないばー」をして

あそぶ姿も観察されています。単純ではあるが、自分であそびを発見したり、そのあそびを共有しようとする力の芽生えをみることができます。

“ベットの家”は、ベッドとして使わなくなった頃から子どもたちが中に入り込み、ごっこあそびを始めていたようです。家づくりによって、子どもたちのままとあそびが一層活発化し、買い物ごっこも観察されました。第Ⅳ期になると、「いらっしゃーい」「はい、どーじょ」「いただきまーす」などの言葉を交えながらのやりとりや互いの顔を見合わせて笑う姿も見られています。その一方で、狭い場所に集まってあそぶ場面で、かみつきなどのトラブルも出現しています。そうした問題に対処するため、その後のあそびには保育者が必ず1人つき添う配慮をしています。

#### [散歩]

月齢の低い子どもが6月に入所して以降、散歩の回数が多少減少したようですが、それに関してはもう少し工夫が必要であったと反省しています。ただし、園外での散歩ができなかった分を園庭でのあそびで補ったようです。園外で散歩をする際は、市内中心地で交通量が多いことや歩行力の未熟さもあり、バギーや避難車に乗せての外出になることが多かったようです。室内外での移動環境にも工夫を行ない、室内をできるだけ広く動き回れるように整理し、ハイハイや伝い歩きによる探索活動を引き出すようにしています。また、つかまり立ちが出来るように巧技台を用意したり、階段の登り下りに挑戦させるために意識的に連れ出すようにもしています。第Ⅳ期の終り頃には、ほとんどの子どもが自分の足で歩いて散歩に行けるようになったようです。できるだけ交通量の少ない道を選び、近くの市民会館（往復約1km）までの距離を寄り道しながら散歩を楽しめるまでになりました。

#### ④成長過程で見られた“かみつき”や“人見知り”とその変化

この時期の子どもたちに比較的頻繁に見られる現象として、かみつきや人見知りがあります。かみつきは自分の要求が次第に明確化になるという重要な意味を背景にもっていますが、その被害に会う子どもたちにとっては大変です。人見知りについても、安定した信頼関係を必要としている子どもたちが多く、様々な原因による不安状態が人見知りとなって出現し、保育者から離れようとしません。集団での生活だけに、こうした子どもたちへの具体的対応はとりわけ重要になるだけに、丸野さんもこの減少をとり挙げています。

#### 【M子の場合：H7年4月14日生まれ】

5月に入ってかみつきが頻繁に出始めました。言葉も次第に出るようになり、歯も生えてきた時期で、突然引っ掻いたり、かみついたりするようになったようです。頻発する場面としては、自分も持っている玩具を他児がとろうとした時、自分の気にいらぬことをされた時、しかもそのほとんどが狭い場所で保育者が目が届かない所で起こっています。

保育者は、事前の策として、あそび場面では玩具を人数分準備すること、また食後の場面では必ず保育者が傍につき添うことなどに配慮しました。それでもかみつきが起こった場合、M子をしっかり抱きしめてM子や相手の気持ちを代弁するなどして、気持ちが落ち着くまで触れ合うことを大事にしたようです。11月頃までかかったようですが、漸くM子のかみつきがほとんどみられなくなりました。他児との力関係が逆転したことや「貸して」が言えるようになったことなどが関係していると分析しています。

保護者に対しても、この時期のかみつきに関して理解を求める努力を行なっています。しかしちょっとした手違いで、かみついて怪我をさせた子の保護者をつらい立場に立たせるトラブルも生じたようです。

【Y男の場合：H7年7月24日生まれ】

夏頃から「人見知り」が顕著になり、保育者への後追いが出現したそうです。保育者が抱くと少し落ち着きをとり戻すのですが、離すと再び泣きじゃくり、分離不安的傾向も示していました。場面としては、16時に保育者が交替し部屋を移る際に頻発しています。馴染みの少ない部屋に移ることへの不安感、お尻の湿疹がその頃ひどかったこと、あるいは母親の仕事が忙しくてかまえない状況が続いていたことなども関係していたと思われます。そうしたことを考え合わせると、一種のただこねと考えられるし、不快感や分離不安を伴った場所見知りとみることもできます。

保育者の対応として、16時以降を担当する保育者がよりきめ細かい接し方をするように職員会議で話し合いをもったようです。湿疹治療をはじめ、気分転換をはかるためにY男を散歩に連れ出したり、できるだけ一対一で向き合いながらできたことをほめてY男に自信をもたせたりしています。時には担任の保育者がY男と一緒に連れ立って移動先の部屋まで行き、中にいる年上の子どもたちや16時以降を担当する保育者との交流を意識的に行なっています。その結果、12月頃には動揺がほとんど見られなくなりました。

保護者に対しては、保育所での様子を知らせ、可能な限りY男と接する時間をとって欲しいことと湿疹治療をお願いしています。Y男の祖父が迎えに来た時、たまたま他の子に手をとられていたためにY男が泣いているのに気づかず、「泣いているY男を放っていた」と激怒されたこともあったようです。

#### ⑤ 1年間を振り返って考えたこと

0歳児は、一見すると、毎日の生活を健康な状態で過ごすなかで自然と育っていくようにみられがちであることに對し、人間の最も基本的な生きる力（歩行、食事、排泄、生理的基盤などの発達）を培う重要な時期であることを丸野さんは強調しています。その発達を引き出すためには、子どもの気持ちに寄り添いながら、ゆったりとかつ丁寧に働きかけていくことの大切さを改めて痛感したようです。そうした対応が子どもとの信頼関係を築くことになる実感しているようです。

自分の気持ちをまだ言葉では適切に表現できない0歳児にとって、「泣く」「甘える」「指しゃぶりをしてじっと耐える」「元気がない」「かみつく」「食べない」「寝ない」などの姿から、自分の気持ちをよみとってくれる大人がいるか否かは重大なことです。それができる保育者に一歩でも近づけるように丸野さんも取り組んでいます。なかなか満足いく保育実践に到達できないという不満を抱いているようです。

しかし今回の0歳児保育の実践で、保育者集団の楽しいの関係が子どもたちへの意欲的な関わりをもたらしてくれたと丸野さんは指摘しています。協力体制を確認し合ったり、問題が起きれば話し合いで共通理解を深めたり、また互いの役割を補いながら保育内容へのアイデアを出し合える関係が何よりも大切なことではないかと問いかけています。

### 3. 0歳児の成長・発達と保育のあり方を実践をもとに考える

乳児保育の課題で挙げた中から3点を中心に、今回の実践を検討しておきます。

### (1) 保育者と子どもの関係づくり

今回の実践では、子どもを4～5月入所児のグループと6月入所のグループの2つに分け、保育者の担当を決めて保育にあたる体制をとっています。各グループを担当する保育者間での役割分担についても話し合いがもたれたようです。

こうした担当制をとることは子どもとの「特定の継続的な関係」をつくっていく上で有効な方法です。そのもとで日々の生活活動とともに過ごし、保育者と子どもとのよい関係がつけられていくことが「その子の心象風景」を共有する可能性ももたらし、保護者との関係づくりにもプラスの影響をもたらします。ただし、担当者を決める際には保育者のキャリアも考え、基本的にはキャリアの長い保育者が月齢の低い子どもを受け持つ必要があります。今回はその点に関して配慮がなされていたようです。また今回とは異なりませんが、各グループに複数の保育者がいる場合は朝の受け入れ役やその日の生活の予測をたてるリーダー役も必要となります。また、サブやフォロー役は落ち着いた生活がおくれるように「子どもの心にむけてアンテナ」をはったり、先を見通してミルク、食事、布団などの準備をする必要があります<sup>(5)</sup>。

担当制をとっても「特定の継続的な関係」につながらない形式的なものであっては意味がありませんが、今回の実践にはしぐさなどから子どもの気持ちをよみとろうとする丸野さんの努力がうかがえるし、あそびその他の活動にもその基本姿勢が活かされていました。その結果として、あそびの部分で記述した「気持ちなどが子どもの表情からよみとれるようになり、信頼感ともいえる結びつきが形成されることに改めて“不思議さ”と驚きを感じた」という、子どもと丸野さんとの通じ合う関係がもたらされたのでしょうか。また、感想部分にあるように、担当した保育者との意思疎通や協力関係がうまくいったことも保育者と子どもの関係づくりにプラスの影響をもたらしたと思われる。

### (2) 日課と生活活動について

乳児期は栄養、睡眠、排泄などの生きていくための基本的力、そして周囲の人やものへの関心や働きかける力を身につけていく重要な時期です。基本的力を援助していくには一人ひとりの子どものリズムを大事にしながら対応していかなければなりません。そのためには、この時期に共通する生活リズムを理解するとともに、目の前の子どものリズムや要求を的確に把握することが必要です。一定の基準にあてはめるだけでなく、共に生活している子どもの姿に寄り添った対応が求められます<sup>(6)</sup>。子どもの要求は大人の関わり方との相互作用で形成される側面をもっていることを再認識すべきでしょう。

日課の基本的流れをふまえつつ各々の子どもへの細かい対応が見られます。2回寝から1回寝への移行時や子どもによる睡眠時間の違いにも配慮がなされています。排泄では排泄したことの自覚を快・不快をとおして実感させていくため、保護者に布おむつ使用への理解を求め、見通しをもって無理なくパンツへ移行させています。食事も発達の観点から内容を違えたり、好き嫌いや食事時間の個人差などにも十分配慮されています。ともすれば“がんばって”食事をさせがちですが、保育者の方が様々な工夫をしようと“がんばって”います。少数の保育者でこのような対応を持続していくことは大変な作業です。日課は「生活のうつわ」であり、無秩序や画一的であってもいけません。食べること、寝ること、あそびなどが交替しながらつながって流れていくことが大事です<sup>(7)</sup>。その際、あそびが「つながり」としての役目を果たす点にも注目する必要があります。まとまった時間を

保障してあそぶだけでなく、活動の区切りにちょっとしたあそびを導入する取り組みなどはまさに「つながり」としての役割を「切り替え」として活用し位置づけたものといえます。ただ、そうした日課をつくっていく場合、子どもの成長に伴って変えていくものと変えないものが何かを十分自覚しておく必要があります。日課もそれに応じた変更を大枠で示していく必要があります。

あそびでも様々な工夫がなされています。もっと沢山つくる予定にしていたようですが、それでも今回の手作りおもちゃはなかなかのものです。身近にある材料や使わなくなった備品などをうまく活用していました。通常、どこの保育所でも乳児期の子どもの発達にみあった玩具というのはそれほどありません。質の良いものを購入しようとする高価で手ができません。たとえ購入できても全員の子どもの分まで揃えられないのが実情です。乳児期には質量共に適切なおもちゃが保障される必要があります。手作りおもちゃはそういった事情から求められてきたものです。様々な機能を訓練的ではなく意欲や機能間のバランスを保ちながら主体的な力として獲得していく上で、この時期のあそびは重要な意味をもっています。音のするもの、動くもの、イメージしてあそべるもの、みたくやつもりをひきだすものなど、年齢に応じたおもちゃを今後とも工夫していくことは大変重要なことです。

### (3) 乳児の「状態」について

「状態」は“かみつき”“だだこね”において問題にされ、きめ細かい配慮を行なっています。子どものなかで成長してきたもの、家庭の状況、保育所の要因などを具体的に検討しながらその子の「状態」を理解し、その子の要求に寄り添った対応を検討しています。たとえ成長の証として意味のある行動であっても、集団保育の生活場面では放置できない場合は適切な手だてを検討する必要があります。今回は「困った行動」の部類に入る行動とその子の「状態」が問題にされていますが、目立つ行動以外での子どもの「状態」についても問題にし、日課や保育者の関わり方を具体的に探究していく必要があるのではないのでしょうか。

### おわりに

0歳児を対象にした丸野実践について、保育者と子どもの関係づくり、関係づくりを具体化するものとしての生活づくり、乳児の「状態」を把握した保育の工夫等について若干の検討を行ないました。

個々の保育者の保育体験を記録として残すことは、保育者としての仕事をしながらであることを考えると誰にでもできることではありません。しかし保育体験が閉じられた「個人内の保育観」として蓄えられるだけでは保育所全体の質的向上にはつながらないだけに、無理を承知で実践の客観化を保育者には求めたいのです。保育活動や子どもに対する「仮説」を継続的に検討し、確かめられた成果を蓄積して欲しいと考えます。そしてそれを他の保育者や保護者との間で伝え合い、見直す作業を保育活動の一部にする必要があります。そして借りものの保育ではない、つまみぐいの保育でもない、多少の不十分性はあっても自分（たち）の保育といえる実践をつくりだして欲しいのです。今後も保育者にその作業を求めていきたいと考えています。ただし、「ま、ぼちぼちいこか」の精神で！

謝辞：今回の報告資料を提出して下さった丸野さんをはじめ、鴨川さん、宗さんに改め

て感謝の意を表したいと思います。

## 引用文献

- (1) 諏訪きぬ『かかわりのなかで育ちあう』1992年、p206、フレーベル館
- (2) 金田利子「乳児保育実践の到達点と課題」『保育の研究』13, 1994年, p30-46, 保育研究所
- (3) 諏訪きぬ「乳児保育の今日的課題」『保育の研究』13, 1994年, p12-15, 保育研究所
- (4) 神田英雄「乳児保育と発達研究」『保育の研究』13, 1994年, p51, 保育研究所
- (5) 鶴川桔梗保育園・諏訪絹『保育が変わるとき』1990年, p111, ひとなる書房
- (6) 汐見稔幸・勅使千鶴編『0歳 “いないいないばあ” で笑って』1992年, p194, 労働旬報社
- (7) 久保登志子・中村千代・丸尾ひさ『乳児の保育』1981年, p195, フレーベル館